

奥熊野の一村落における宗教の多様性とその要因

藤村 健一

- I. 目的と方法
- II. 小栗須集落の地域的特徴
- III. 小栗須集落の宗教とその信者
 - (1) 小栗須集落の宗教
 - (2) 各宗教の伝播と展開
 - (3) 信者の活動
 - (4) 信者の社会的属性
- IV. 宗教と民間信仰
 - (1) 小栗須集落の民間信仰
 - (2) 各宗教信者による民間信仰
 - (3) 新宗教と民間信仰の関係
 - (4) 新宗教定着の要因と民間信仰
- V. 結論

I. 目的と方法

日本における宗教を地域社会のレベルで捉えると、複数の宗教、宗派ならびに民間信仰が併存または混交していることがごく一般的であり¹⁾、しかも個人のレベルでは一人の人間が複数の信仰を同時に有することすら珍しくない²⁾。このような信仰の多様性に関して、村落社会地理学では従来より、氏子集団・檀徒集団・講集団などにも関心を払ってきた。山口³⁾、石原⁴⁾、水津⁵⁾は、こういった宗教的な社会集団と藩政村や小集落との関わりに言及している。さらに、山野⁶⁾、平井⁷⁾、島津⁸⁾、林⁹⁾、岩鼻¹⁰⁾、今里¹¹⁾、八木¹²⁾、今本¹³⁾は、神社や小祀などのような祭祀に関する諸施設の立地や、宗教的な社会集団とその儀礼が、同族集団の紐帯強化や村落空間の統合と分割に

寄与することを明らかにしている。

村落社会地理研究を除けば、信仰の実態それ自体は、宗教地理とりわけ外来宗教の伝播と定着に関する研究の中で主として論じられてきた。例えば、キリスト教を扱った徳久¹⁴⁾、川田¹⁵⁾、竹村¹⁶⁾、ならびに幕末期以降に成立した新宗教を扱った当麻¹⁷⁾、森¹⁸⁾などである。このうち竹村は、末日聖徒イエス・キリスト教会が山形県と富山県の都市で定着した要因を、既存の仏教宗派の性格との関連の中で論じた。また、当麻は、静岡県農村での丸山教の定着を土地所有や同族関係といった社会的要因によって説明した。森は、山梨県の農村での禊教の定着に対して地域の指導者層と郷社・村社が果たした役割を明らかにした。竹村の研究を除けば、これらの多くは宗教の定着要因を主に社会的要素に求めており、既に存在している宗教や民間信仰¹⁹⁾と外来宗教とがどう関わったかという視点は宗教地理学ではほとんど採用されていない。

一方、宗教社会学では、地域社会に対する外来宗教と在来の宗教や民間信仰との関係に着目した研究は多い。外来宗教のうち、キリスト教を取り上げた研究も少なくない²⁰⁾。だが、本稿ではさしあたり、国内でキリスト教よりも多数の信者を有する新宗教を取り上げたい²¹⁾。新宗教を扱った研究では、まず森岡・西山のもの²²⁾がある。彼らは妙智會が山形県の温泉集落で定着した要因を、社会的要素や在来の宗教、及び山伏・巫女による祈禱などの民間信仰との関連から考察した。彼ら

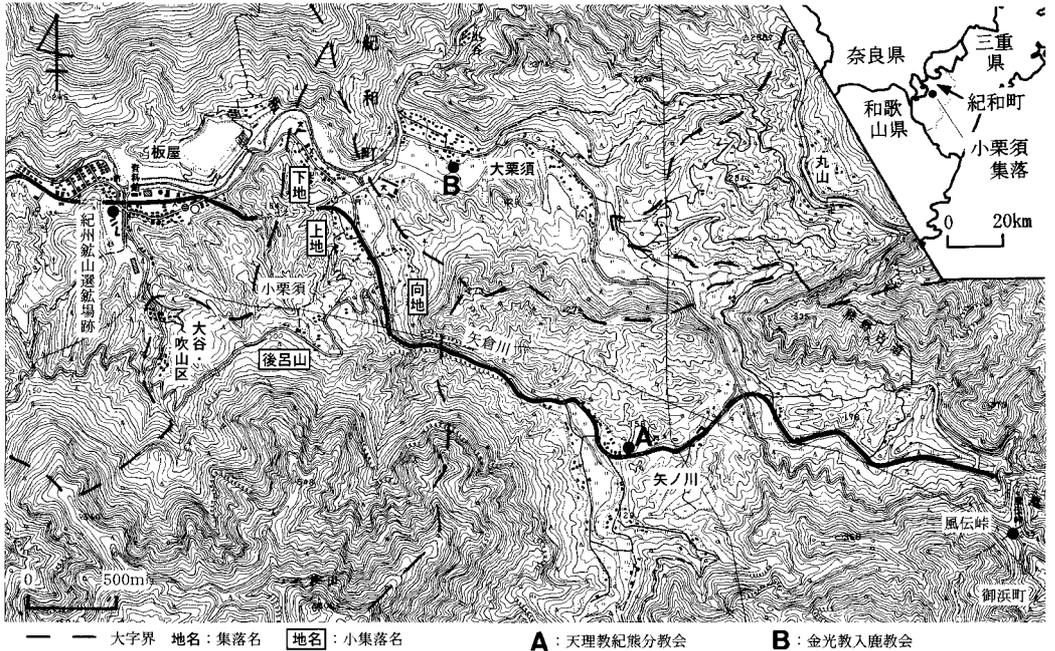


図1 小栗須集落とその周辺 (25,000分の1 地形図「瀬八丁」より筆者作成)

の分析概念を継承した磯岡²³⁾は、三重県の山村における円応教の定着要因を、在来の先祖祭祀や「拝み屋」すなわち祈祷師による祈祷との親和性の点から考察した。

また、1970年代以降、九学会連合による調査を契機に、南西諸島における外来宗教と在来信仰との関係について研究が進められた。藤井²⁴⁾は喜界島の農村において、真宗が在来の神社神道と共に葬祭を請け負うことで定着をみたのに対し、創価学会は伝統的な葬祭のあり方を拒んだにもかかわらず、社会変動による共同体規制力の衰退に乗じて定着したことを示した。また洗²⁵⁾、中牧²⁶⁾、井上²⁷⁾らは、南西諸島の民間信仰であるノロ・ユタ祭祀への新宗教の対応を分析した。その結果、ノロ・ユタ祭祀への天理教信者の寛容さと創価学会信者の否定的態度が浮き彫りとなった。

さらに宗教社会学では、集落住民の宗教意識・信仰の実践・民間信仰との関わりなどを分析した研究が高橋²⁸⁾、志水²⁹⁾、芹川³⁰⁾、川崎³¹⁾らによって行われている。とりわけ志水

は、滋賀県の農村における神社神道、真宗、天台宗ならびに霊友会の併存について分析した。そして、霊友会が先祖祭祀の強調により定着をみたこと、また神社神道は村の宗教として、真宗・天台宗は家の宗教として、そして霊友会は個人の宗教として、それぞれ次元が異なる宗教として理解されたことがそれらの共存に繋がったことを指摘した³²⁾。

しかし以上の諸研究でも、藤井と志水のもの³³⁾を除けば、対象とされた新宗教以外の信仰に関する、個人レベルや家レベルでの詳細な分析は見られない。村落における外来宗教の定着や在来の多様な信仰との共存状態を考えるには、近世以前に成立した既成仏教や神社神道、民間信仰などの在来信仰についてもより幅広く取り上げるべきであろう。

本稿ではこの視点に立ち、三重県南牟婁郡紀和町小栗須集落を取り上げる。この集落には、既成仏教や神社神道、天理教・金光教・創価学会などの外来の新宗教が定着している。さらに多様な民間信仰も保持されている。

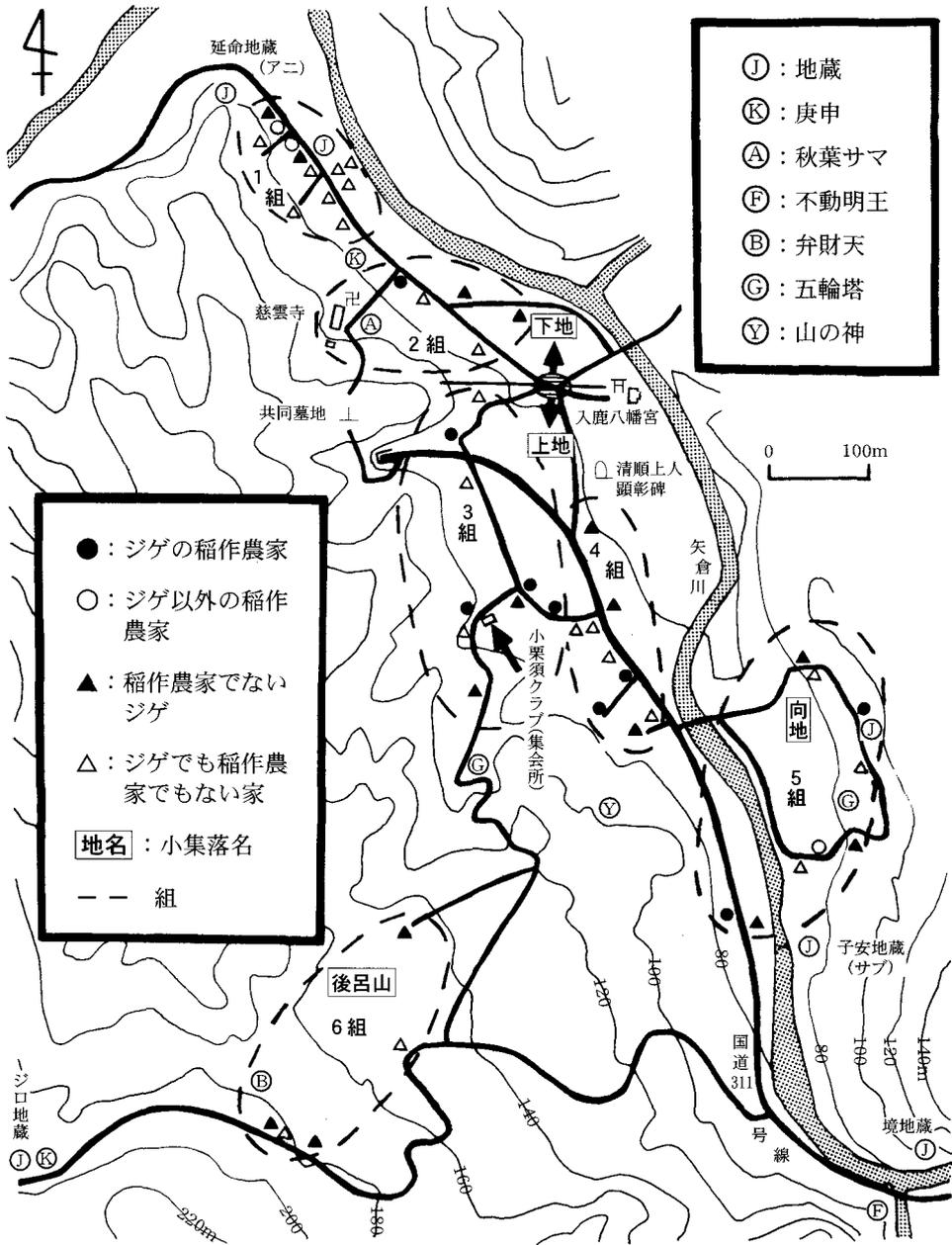


図2 小栗須集落と祭祀対象物

る。そこで、この集落の宗教的多様性を住民の信仰行動のレベルで具体的に分析し、外来宗教である新宗教が定着し在来の多様な信仰と共存している要因を、社会的ならびに宗教的側面から考察する。まず集落の地域的特徴を踏まえ(第二章)、各宗教とそれらを信仰す

る人々の社会的属性について考察した上で(第三章)、新宗教が定着した要因ならびに複数の宗教が共存する要因を、民間信仰を踏まえながら探る(第四・V章)。現地調査³⁴⁾での住民や各教団関係者への聴き取り資料を主に用いるほか、教会史を初めとする教団側の資

料も随時使用する。

II. 小栗須集落地域的特徴

小栗須集落³⁵⁾は、奥熊野地方の一角を占める旧南牟婁郡（現在の熊野市と南牟婁郡）の山間部に位置する（図1）。集落には国道311号線が通じているが、紀和町—御浜町間の風伝トンネルが1990年に開通するまで、熊野市などの沿岸部へ行くには急峻な風伝峠を越えねばならず不便であった。家屋と水田は、板屋川とその支流である矢倉川の河谷に分布する。集落は、下地、上地、向地、後呂山という4つの小集落からなる³⁶⁾。近隣組について見ると、下地に1組と2組、上地に3組と4組が位置し、向地と後呂山がそれぞれ5組と6組となっている（図2）。戸数は50戸で、人口は99人である³⁷⁾。

1960年代まで、住民は稲作農業や林業に主に従事した。また、隣接する板屋集落の紀州鉾山³⁸⁾で働く者も少なくなかった。だが、高度成長期以後、農林業の衰退と鉾山の閉山を経て、小栗須集落の就業構造は大きく変化した。今では住民の主な職業は公務員や会社員である。水田を所有する稲作農家は12戸残っているものの、水田面積は最小で1反5畝、最大でも4反といずれも狭隘なため、稲作は自給的なものに過ぎない。集落付近に山林を所有する者も少なくないが、現在では林業も

ほとんど行われていない。また、戸数は30年間で約4分の1に減少し、人口の半数近くが65歳以上の高齢者で、過疎化が進んでいる。

小栗須集落は中世以来の歴史を持つが、鉾山に近かったこともあり、転入者を抱えることになった。「ジゲ」すなわち江戸期以前から小栗須集落に存在する家は、集落全体の約半数に過ぎない。明確な同族集団は見られず、本家は存在するものの分家との繋がりは弱まっている³⁹⁾。稲作農家の約8割、山林を所有する家の約7割はジゲであり、本家にあたる稲作農家では水田を3～4反所有する者が大半を占める。また、歴代の区長にはジゲの稲作農家の世帯主が就任してきており、それはしばしば本家が務める。このように、現在でもジゲ、とりわけ本家は耕地と山林所有に関して比較的優位にあり、集落の指導的役割を担っている。

ところで、下地には他の小集落と比べジゲが少なく、明治期以降に転入してきた家が多い。ここには酒屋・雑貨屋などの商店が3戸、理髪店が1戸立地しており、街村的性格が見て取れる。それとは対照的に、上地や向地ではそれぞれ3分の1の家が稲作農家である。かつて稲作農家だった家も、上地・向地・後呂山では多く見られる。

III. 小栗須集落の宗教とその信者

(1) 小栗須集落の宗教

小栗須集落には、入鹿八幡宮と曹洞宗慈雲寺が立地する。前者には宮司は在住せず、後者には住職が在住している。曹洞宗を初めとした既成仏教の寺院の檀家は60戸で、全戸数の約6割に止まる（表1）。一方で、新宗教に改宗した家は約2割を占める。これらの他、神

表1 小栗須集落の宗派構成

宗 派	戸数 (戸)	人数 (人)	ジゲ		稲作農家	
			戸数 (戸)	人数 (人)	戸数 (戸)	人数 (人)
既成仏教	31	60	16	33	8	21
うち金光教未改宗信者	—	14	—	10	—	7
うち天理教未改宗信者	—	5	—	3	—	3
神社神道	3	4	0	0	1	2
うち天理教未改宗信者	—	2	—	0	—	1
天理教	6	17	5	15	3	6
創価学会	4	5	1	1	0	0
大本	1	2	1	2	0	0
不明	6	11	1	2	0	0
集落全体	50	99	24	53	12	29

1999年の聴き取りより筆者作成。注：「既成仏教」…31戸中27戸が慈雲寺の檀家または住職の家。60人中3人が金光教と天理教の未改宗信者を兼ねる。「集落全体」…戸数を合計すると51戸となるが、これは曹洞宗と神社神道の信者が同居する家が1戸あるため。

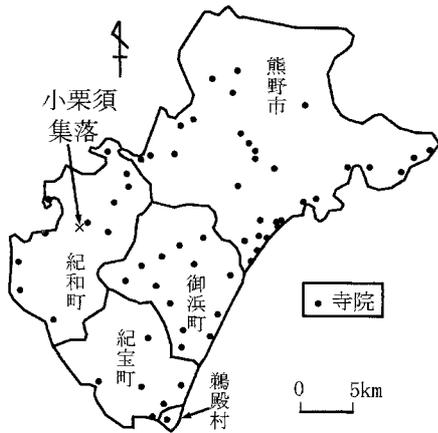


図3 旧南牟婁郡における曹洞宗寺院の分布
(曹洞宗出版部編『曹洞宗寺院名鑑』、
曹洞宗宗務庁、1997より筆者作成)



図5 旧南牟婁郡における金光教教会の分布
(1997年現在。金光教本部資料より筆者作成)

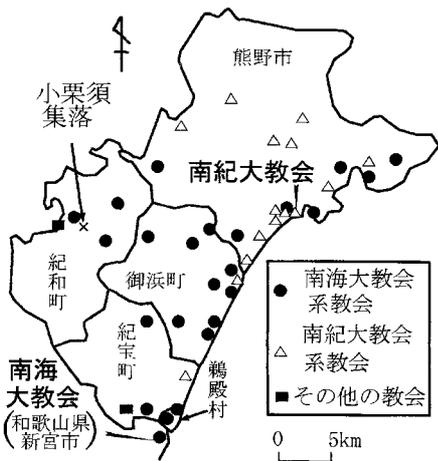


図4 旧南牟婁郡における天理教教会の分布
(天理教表統領室調査課編『天理教教会名称録 三』
重教区』、天理教教会本部、1993より筆者作成)

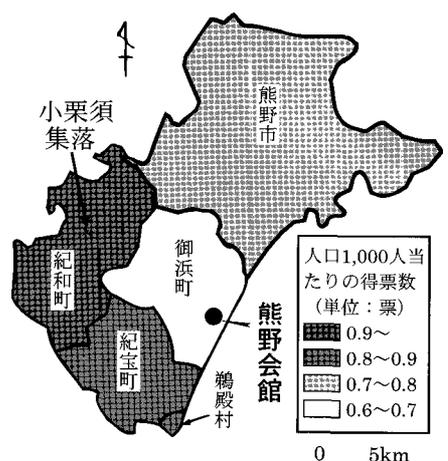


図6 旧南牟婁郡における公明党の対人口比得票数
(1998年参議院議員選挙比例代表)

社神道に改宗した家も3戸ある。ここで言う「改宗」とは、信仰する宗教の方式に則って葬祭を行うと決めることを意味する。新宗教に改宗した家の内訳は、天理教が6戸、創価学会が4戸、そして大本が1戸である。この他、改宗はしていないが、金光教教会にしばしば通う者が14人前後、天理教教会に通う者が7人前後いる。本稿ではこうした人々を、既に改宗した「信者」と区別して「未改宗信者」と呼ぶ。以上のように、集落には複数の

宗教が定着しており、住民の信仰行動は多様なものとなっている。

小栗須集落におけるこのような宗教的多様性は、旧南牟婁郡では果たして例外的なのだろうか。曹洞宗、天理教、金光教ならびに創価学会の旧南牟婁郡における信者の分布を、寺院・教会分布などを通して解明し、このことから小栗須集落の相対的位置付けを図る⁴⁰⁾。

旧南牟婁郡の仏教寺院では曹洞宗が圧倒的で、同派の寺院は山間部を全域に互って偏り

なく分布している(図3)。同様に天理教教会も、ほぼ全域に分布する(図4)。このため、曹洞宗と天理教は域内に信者が広く分布していると見なすことができる。

多くの寺院・教会が分布する曹洞宗や天理教と異なり、金光教の教会は南牟婁教会(熊野市)、御浜教会(御浜町)ならびに入鹿教会(紀和町)の3つに過ぎない(図5)。だが各教会長の話では、南牟婁教会は市中心部に立地するものの、信者は市内の山間部にも分布しており、入鹿教会の信者も紀和町や奈良県北山村に広く分布している。一方、御浜教会の信者分布はほぼ教会周辺に限られるという。

創価学会は寺院や教会を持たず、各地にある会館も地区単位で分布している。そこで、1998年の参議院議員選挙比例代表における公明党の得票数を基に信者分布を推定する。得票数は熊野市での1,623票に対し、紀和町では240票に過ぎない。だがその対人口比では、紀和町が域内の市町村で最も高い(図6)。地元の教団幹部の話によると、この地域での信者は人口の1割弱であり、これは山間部でも変わらないという。

こうした検討から、各宗教ともに信者は旧南牟婁郡内でさほど偏りなく分布しており、小栗須集落の宗教的多様性は旧南牟婁郡でも特に例外的ではないと考えられる。このような多様性は、どのような過程で形成されたのだろうか。

(2) 新宗教の伝播と展開

そこで、小栗須集落に存在する宗教のうち主要なものとして曹洞宗、神社神道、天理教、創価学会ならびに金光教について考察を進めよう⁴¹⁾。

小栗須集落の既成仏教信者の大半は、同集落唯一の寺院である曹洞宗慈雲寺に属する。慈雲寺は中世に開かれ、近世初期に曹洞宗のもとで再興されて大本山永平寺の直末となった。慈雲寺は、南隣する共同墓地を管理す

る。慈雲寺檀家だけでなく、新宗教に改宗した家の墓も大半がここにある。小栗須集落における慈雲寺の檀家数は27戸である。なお、同集落には他集落の寺院の檀家も4戸ある。

また、小栗須集落には神社神道の家が3戸ある。これらの家は、1889年に奈良県十津川村が水害に遭った際、小栗須集落へ移住した人々の子孫からなり、葬祭に際しては十津川村の玉置神社の神主に依頼している。

天理教信者は、小栗須集落に隣接する矢ノ川集落にある紀熊分教会⁴²⁾に所属する。未改宗信者が通うのも主にこの教会である。また後呂山には、小栗須集落に住む信者の組織である「こもと」を主宰する家がある⁴³⁾。

天理教は旧南牟婁郡へ1887年に伝播し、病氣や怪我の治癒を通して布教が行われた(表2)。その際に地域社会との摩擦が生じたにもかかわらず、急激に信者を増やした。その要因の一つには、伝播当初から社会的地位の高い者が信者の中に少なからず存在したことがある。そうした信者の一人に、かつての入鹿組⁴⁴⁾大庄屋で、矢ノ川集落に住み紀熊分教会初代会長を務めた大江正之助がいた。彼は入信以前から廃仏毀釈論者で⁴⁵⁾、天理教を神道的一种として受け入れたと見られる。天理教は小栗須集落へも19世紀末に伝播したと思われるが⁴⁶⁾、その際、名望家である大江が信者だったために住民の反発や警察からの妨害はほとんど無かったと言われている。

金光教の未改宗信者が通う入鹿教会は、小栗須集落に隣接する大栗須集落にある。金光教は、旧南牟婁郡へは20世紀初期に伝播したと見られる。その布教方法は、天理教同様、病氣や怪我の治癒が中心であったが、地域社会から大きな反発を受けることもなく教勢を拡大した。小栗須集落に伝播したのは、1933年の教会設立前後と見られる。

創価学会の信者は、御浜町の創価学会熊野会館を中心とした「熊野本部」に属している。熊野本部は旧南牟婁郡全域を管轄する。創価

表2 旧南牟婁郡における新宗教の布教・伝道の歴史

	天理教	金光教	創価学会
明	(明治20年)南海支教会初代教会長・山田作治郎が入信し、川瀬村(現・御浜町)で布教開始。 (明治21年)南紀支教会初代教会長・下村賢三郎が入信し、五郷村(現・熊野市)で布教開始。 (明治23年)南牟婁郡一帯で天理教反対規約が結ばれ、信者への科料などが行われる。 (明治24年)和歌山県新宮町に南海支教会設立。 (明治25年)木本町(現・熊野市)に南紀支教会設立。矢ノ川集落に紀籠分教会設立。	(明治24年)熊野教会初代教会長・田畑広助、兵庫県尼崎町にて入信。 (明治34年)田畑、新宮町にて布教開始。	
治	(この頃より明治末にかけ、南海・南紀系の教会が南牟婁郡で相次いで設立。小栗須集落にもこの頃伝播か。 (明治42年)南海支教会、南海大教会に昇格。	(明治39年)同町にて熊野教会設立。この頃、南牟婁教会初代教会長・松田熊市が入信し、布教開始。 (明治44年)松田の故郷の有井村(現・熊野市)にて南牟婁教会が設立。	
大正・昭和初期	(大正～昭和初期にかけ、南海・南紀)両系統の教会が全国に設立。 (昭和15年)南紀支教会、南紀大教会に昇格。	(昭和7年)御浜教会設立。 (昭和8年)入鹿教会設立。小栗須集落にはこの頃伝播か。	
戦		(昭和20年代)南牟婁・御浜・入鹿の各教会で信者数が激減し、敗戦時の約3分の1にまで落ち込む。 (昭和60年)入鹿教会の前教会長が死去。教会が無人に。	(昭和27年)新宮市内に初の信者が誕生。 (昭和28年頃)旧南牟婁郡に初の信者が誕生。 (昭和30年代前半)夏季地方折伏の一環として東京都・大阪府からの信者による布教が盛ん。小栗須集落に初の信者誕生。 (昭和40年頃)旧南牟婁郡で教勢が急進。
後	(昭和61年)南海大教会のよふぼく(布教資格を持つ信者)数がこの年から減少。 (平成5年)南紀大教会のよふぼく数がこの年から減少。	(昭和61年)入鹿教会に現教会長が赴任。	(昭和44・45年)いわゆる「言論問題」(創価学会本部が教団に対する批判書の出版差し止めをを自民党へ働きかけたこととされた問題)により教勢が横ばい傾向に転じる。 (平成10年)御浜町に熊野会館が設立。熊野本部が置かれる。

資料：天理大学おやさと研究所編『改訂天理教事典 教会史篇』、天理教道友社、1989。天理教南海大教会史料集成部編・発行『南海大教会史』1、1961。天理教南紀大教会史料集成部編・発行『南紀の道』、1960。金光教熊野教会編・発行『熊野の光(布教七十年記念)』、1971。天理教統御室調査課編『天理教統計年鑑』天理教教会本部。金光教本部資料。その他、各教団の関係者への聞き取りによる。

学会は1953年頃に旧南牟婁郡へ伝播した。その布教方法は「折伏^{しゃくぷく}」⁴⁷⁾である。1950年代後半には、東京都や大阪府などから訪れた信者が旧南牟婁郡とその周辺で、戸別訪問中心の激しい折伏活動を行った⁴⁸⁾。小栗須集落で初めての信者が生まれたのもこの頃である。

(3) 信者の活動

慈雲寺では花祭り(4月)、大施餓鬼(8月)などの諸行事が行われ、檀家の多くが参加する(表3)。また、住民の間では墓参の慣行が

盛んで、正月・彼岸・盆の時季以外でも共同墓地にある墓へ頻繁に参る。その際、信者は寺へ挨拶していくのが通例である。この他、檀徒集団である「慈雲寺護持会」や、信仰に熱心な信者が一般の信者に仏事の仕来りを伝える「教化部」が設けられている。だが、一般の信者にとって慈雲寺へ足を運ぶ機会は寺の行事・法事・墓参のみである。参禅や説法といった教化活動が行われていないため、彼らが先祖祭祀以外の信仰行動のために寺を訪れることはほとんどない。

表3 曹洞宗・天理教・創価学会信者の年中行事

月	曹洞宗(慈雲寺)信者	うち金光教未改宗信者	天理教信者	創価学会信者
1	1/☆◎入鹿八幡宮・慈雲寺へ初参り。○共同墓地へ墓参。 2/◎初寄合。	1/☆◎入鹿八幡宮・慈雲寺へ初参り。○共同墓地へ墓参。 ●水道水で若水汲みをする。 2/◎初寄合。	1/◎入鹿八幡宮へ初参り。 ○共同墓地へ墓参。☆紀熊分教会元旦祭。 2/◎初寄合。 9/☆紀熊分教会春季大祭。	1/☆熊野会館で初参り。 2/◎初寄合。
2	3/●節分。神棚・仏壇に豆をお供え。	3/●節分。神棚・仏壇に豆をお供え。 4/◎秋葉様の祭。	3/●節分。神棚に豆をお供え。 4/◎秋葉様の祭。	
3	彼岸/○共同墓地へ墓参、シキミ・花等をお供え。初彼岸の家へお参り。 15/◎入鹿八幡宮宮祭。	彼岸/○共同墓地へ墓参、シキミ・花をお供え。初彼岸の家へお参り。 15/◎入鹿八幡宮宮祭。☆入鹿教会大祭。	15/◎入鹿八幡宮宮祭。彼岸/○共同墓地へ墓参、サカキ等をお供え。初彼岸の家へお参り。 21/☆紀熊分教会春季霊祭。	彼岸/○他集落の先祖の墓へ墓参。シキミ等は供えない。
4	8/☆慈雲寺花祭り。	8/☆慈雲寺花祭り		
5			3/☆紀熊分教会大霊祭。	
7	☆慈雲寺大掃除。	☆慈雲寺大掃除。		
8	第1土曜/◎北山川河岸の火祭を見物。 お盆/○共同墓地へ墓参、シキミ・花等をお供え。初盆の家へお参り。 16/☆慈雲寺大施餓鬼。○供物を川に流す。	第1土曜/◎北山川河岸の火祭を見物。 お盆/○迎え火を焚く。共同墓地へ墓参、シキミ・花等をお供え。初盆の家へお参り。 16/☆慈雲寺大施餓鬼。○供物を川に流す。	第1土曜/◎北山川河岸の火祭を見物。 お盆/○共同墓地へ墓参。初盆の家へお参り。	第1土曜/◎北山川河岸の火祭を見物。 お盆/☆会館で参り。○墓参。初盆の家へお参り。供物を川に流す。
9	十五夜/●月見。 彼岸/○共同墓地へ墓参、シキミ・花等をお供え。初彼岸の家へお参り。	十五夜/●月見。 彼岸/○共同墓地へ墓参、シキミ・花等をお供え。初彼岸の家へお参り。	十五夜/●月見。 彼岸/○共同墓地へ墓参、サカキ等をお供え。初彼岸の家へお参り。 23/☆紀熊分教会秋季霊祭。	彼岸/○他集落の先祖の墓へ墓参。シキミ等は供えない。
10	15/◎入鹿八幡宮宮祭。	初亥/●亥の子餅を作る。 15/◎入鹿八幡宮宮祭。☆入鹿教会大祭。	3/☆紀熊分教会秋季大祭。	
11		12/◎弁財天の祭。		
12	☆慈雲寺大掃除。 31/☆慈雲寺お焚きあげ。	☆慈雲寺の大掃除。 23/◎霜月の禱。 31/☆慈雲寺お焚きあげ。		
備考	◎区の祭には当番にあたれば参加する。	毎月4・18日/☆入鹿教会月次祭。	毎月15日/☆紀熊分教会月次祭。 毎月12日/☆こもとの講社祭。	☆毎月、熊野会館で池田大作名誉会長の演説放送を見る。

1999年の聴き取りより筆者作成。注：☆…宗派の行事。○…民俗的な先祖祭祀の行事。◎…地域社会の行事。●…その他の行事。各宗派の信者が行う代表的な行事を示す。表中の数字は行事の日付。

神社神道の信者は、先述のように玉置神社の氏子としての意識を持っている。しかし、この神社は小栗須集落から離れており、信者が高齢化しているため、この神社との実際の関わりは葬祭などを除けば乏しい。信者は通常時には、入鹿八幡宮を参拝している。

小栗須集落の天理教信者のうち、毎月行われる紀熊分教会の月次祭⁴⁹⁾やこもとの講社祭⁵⁰⁾の大半に出席しているのは5人前後である。信者の家の大半では、家族の中から少なくとも1人が出席するようにしている。これは、紀熊分教会で行われる大祭⁵¹⁾や霊祭⁵²⁾などの祭事への参加についても同様である。

この他、主婦を中心に、こもと単位で参拝や「ひのきしん」(労働奉仕)のために紀熊分教会を訪れることがある。さらに、「おちば」⁵³⁾へ毎月お参りに行く信者も3人前後いる。

なお、天理教の未改宗信者7人の内訳は、曹洞宗信者が5人、神社神道の信者が2人である。天理教教会へ通う動機としては、祖父以前からの家の慣習や病氣・怪我の治癒祈願、近所付き合いなどがある。

創価学会信者の活動は、月1回催される「座談会」⁵⁴⁾が中心である。小栗須集落とその周辺では、板屋集落などの信者の自宅で持ち回りで行われており、信者の約4割が参加し

ているという。小栗須集落の信者のうち、座談会に毎回出席するのは2人前後と多くはないが、時には小栗須集落の信者の自宅で座談会が催されることもある。また信者は月1回、池田大作名誉会長の講演の放送を見るために熊野会館を訪れる。

金光教の未改宗信者14人前後のうち、月次祭に毎月出席するのは半数程度で、残りは大祭(3月・10月)のような祭事へ参加したり、「取次」⁵⁵⁾を受けるために、教会を時折訪れる。彼らはみな既成仏教の信者でもあり、1人を除いて全員が曹洞宗信者である。教会へ通う動機としては家の慣習、病氣・怪我の治癒祈願のほか、自身の心配事の相談、子供の入学試験の合格祈願、近所付き合いなどが挙げられる。

いずれの宗教でも、信者の活動は家単位での行事への参加が中心である。一方、未改宗信者は個人的な現世利益目的でいずれかの宗教の教会へ行く。通う教会を決定する要素は、主に家の慣習や近所付き合いである。

(4) 信者の社会的属性

改宗時期を家毎に見ると、慈雲寺檀家ではジゲは近世以来の檀家だが、それ以外の家は小栗須集落への転入時に新たに檀家となった。天理教の家は集落への伝播当初に改宗しており、神社神道の家は、集落への転入以前に十津川村で既に改宗していた。いずれも現在の信者は、みな当時の信者の子孫にあたる。金光教の未改宗信者でも、両親や祖父母の代から通っている者が14人中12人を占める。一方、創価学会の家では世帯主が入信第一世代である所がほとんどである。

ジゲは天理教の家6戸のうち5戸を占めるが、創価学会の家には4戸中1戸しかない。また、ジゲの住民は金光教の未改宗信者14人のうちの10人を占めている(表1)。また、既成仏教寺院の檀家にはジゲが約半数しかないが、これは特定の宗教を信仰していない転入

者の多くがとりあえず慈雲寺の檀那になることを選ぶためである。本家にあたる家は15戸あるが、うち10戸が慈雲寺檀家であるほか、天理教の家も4戸ある。さらに、慈雲寺檀家である本家10戸のうち4戸には、家族に金光教教会の未改宗信者がいる(表4)。

稲作農家の宗旨はほとんどが既成仏教と天理教で占められており、特に天理教の家では6戸中3戸が稲作農家である(表1)。金光教の未改宗信者でも稲作農家の住民が10人中7人を占め、町議会議員や区長などの経験者も存在する。つまり小栗須集落では、天理教と金光教は稲作農家の住民や地域の指導者を多く抱える、ジゲが主体の宗教である。対照的に、創価学会の信者の大半は転入者である。これらのことは家屋分布にもある程度反映しており、殊に稲作農家の比率が高い上地と向地には金光教の未改宗信者の殆どが居住する。なお、新宗教の定着と信者の本分家関係の間には有意な関連性がほとんど見られない⁵⁶⁾。

このように、信仰行動は信者の家の社会的属性によってある程度規定されていることが明らかになった。だが社会的属性と信仰との関係、とりわけなぜ天理教・金光教がジゲの住民の間に、創価学会が転入者の間に主として定着したのかは、以上の社会的側面への検討だけでは分からない。そこで次章では、小栗須集落における宗教の多様な展開の要因を、より基層的な信仰と考えられる、在来の民間信仰との関連から探ることにする。

IV. 宗教と民間信仰

(1) 小栗須集落の民間信仰

奥熊野地方は、民俗慣行や民間信仰を多く残していることで知られる⁵⁷⁾。小栗須集落でも多くの民俗慣行が存在したものの、脱農化の進展に伴い、稲作儀礼を初めとした年中行事や人生儀礼の多くが消滅した⁵⁸⁾。

小栗須集落の村祭は、区の主催で入鹿八幡宮の宮祭を含めて年6回催され⁵⁹⁾、その準備

は輪番制で毎年、当番にあたった近隣組が行う。かつて宮祭には誰もが参加したものであったが、過疎化や給与生活者の増加なども影響して、現在では住民の4割程度しか参加しなくなった。さらに、盆踊りも1999年以降は開かれなくなった。だが、葬儀に関わる家同士の相互扶助の慣行はいまだに根強く残っている⁶⁰⁾。

一方、伝統的な民間信仰は住民の間である程度保持されている。小栗須集落では地蔵や屋敷神、山の神などが祀られている(図2)。地蔵では「アニ」・「ジロ」・「サブ」と呼ばれる3つの地蔵⁶¹⁾が集落の周縁部に存在し、それぞれが立地する小集落の主婦らにより護持されている。屋敷神は「ジヌシサマ」と呼ばれ、その大半がジゲの屋敷地に位置する。これは各家の初代を祀るものである。山の神としては後呂山にあるもの⁶²⁾が知られるが、これは現在でも山の神講によって信仰され、毎年12月7日には山の神の祭が行われている。慈雲寺の入口にある庚申には、無くし物をした時に参る者が多い。

石神を個人的に祀る事例も幾つか確認できる。例えば、24番の家では代々「カンスケサン」の墓と呼ぶ石を祀っている。カンスケサンとは昔の行き倒れの旅人であると言われている。明治期に当主が病気治癒のため山伏の祈禱を受けた際、その霊を弔うように命じられたことから、墓を設け祀るようになった。この他、拝み屋を頼んだことのある住民も少なからず存在する(表5)。小栗須集落では、拝み屋として「お大師さん」と呼ばれる紀宝町の祈禱師や、新宮市の真言宗寺院の住職などが知られている。依頼の動機としては、病気・怪我の治癒祈願が圧倒的に多い。

次に、民間信仰を実践する者の社会的属性について見ると、地蔵へのお参りを除けば、ジゲや稲作農家の住民の間で民間信仰が盛んに行われていることが分かる。山の神講は4戸からなるが、いずれも上地の本家かその隠

表5 小栗須住民の民間信仰

住民の属性	戸数(戸)	人数(人)	山の神	ジヌシ	地蔵	庚申	神社	宮祭	拝み屋
ジゲ	24	53	5	8	8	6	22	26	7
ジゲ以外	26	46	0	2	11	4	11	13	2
稲作農家	12	29	4	9	7	7	20	22	3
稲作農家以外	38	70	1	1	12	3	13	17	6
既成仏教信者	31	60	4	8	15	9	28	32	7
うち金光教未改宗信者	—	14	—	—	2	7	12	14	2
うち天理教未改宗信者	—	5	—	—	1	3	3	4	1
神社神道信者	3	4	0	0	2	1	1	2	0
うち天理教未改宗信者	—	2	—	—	2	1	1	2	0
天理教信者	6	17	1	2	2	0	4	7	2
創価学会信者	4	5	0	0	0	0	0	0	0
集落全体	50	99	5	10	19	10	33	39	9

1999年の聴き取りより筆者作成。単位は「山の神」・「ジヌシ」が戸数、その他が人数。

居の家である。ジヌシサマがあるのも本家に多い。逆に、地蔵への信仰はジゲや稲作農家以外の住民が中心だが、これはジゲや稲作農家が多い上地には地蔵が存在しないことによると思われる。その他の、山の神やジヌシサマなどへの民間信仰は上地、向地ならびに後呂山が中心である。

このように、小栗須集落では多くの民間信仰が残存している。では、各宗教の信者は民間信仰とどのような関わりを持っているのだろうか。

(2) 各宗教信者による民間信仰

曹洞宗信者で、かつ金光教の未改宗信者でもある住民は、慈雲寺と金光教教会の行事を掛け持ちしている(表3)。区の祭や民俗的な行事にも比較的積極的で、他の曹洞宗信者よりも熱心に多くの宗教的行事を行っている。他方、天理教信者は仏教的行事には参加せず、墓にはシキミの代わりにサカキを供える。しかし天理教教会では、春秋の彼岸の時期に先祖祭祀のための霊祭が催され、仏教での初盆にあたる初精霊が祖霊殿に新たに合祀される。このように、天理教では仏教色を排しながらも先祖祭祀自体は行われている。創価学会信者は、宮祭を初めとした区の祭や寺

院の行事には一切参加しないが、墓参や送り盆などの先祖祭祀は行っている。初盆の家に参り提灯を供えることも共通している。

次に、民間信仰を實踐している人数を宗教毎に見てみよう(表5)。民間信仰は、曹洞宗を初めとした既成仏教の信者で、なおかつ金光教や天理教の未改宗信者を兼ねた者の間で最も盛んである。また、天理教信者の間でもある程度行われている。これは天理教の家におけるジゲの比率の高さによると思われるが、逆に見れば、天理教信者が民間信仰を拒んでいないことの表れとも取れる。紀熊分教会でも、信者が民間信仰を行うことについて特に問題にしていない。一方、創価学会信者は、表中の項目で見ると、民間信仰を一切拒んでいる。これは基本的に、後述する教団本部の意向に沿ったものである。

(3) 新宗教と民間信仰の関係

ここで天理教、金光教ならびに創価学会の、教団としての民間信仰に対する親和性が問題となってくる。これらの教団は今日、伝統的な民間信仰とは少なくとも表向き無縁である。だが大谷⁶³⁾、松井⁶⁴⁾は初期の天理教教団が、また福嶋⁶⁵⁾は初期の金光教教団が、それぞれ呪術的な治病行為を繰り返していたことを指摘した。島齒⁶⁶⁾は一連の研究の中で、天理教と金光教の教祖の神概念を検討し、前者に対するお蔭参りの信仰の影響、後者に対する山伏的な民間信仰の影響を解明した。そして、天理教と金光教を呪術的な習合宗教から新宗教へ脱皮した型の宗教と位置付けた。

さらに金光教の場合は、現在でもその教義が民間信仰に親和的だと受け取れる。教祖の生前の教えを記した「金光教御理解集」には「堂宮の前を通る時には、ご拝をして通れ。(中略)ほかの神を侮ってはならない。藪荒神でも神の位はある」とある⁶⁷⁾。

一方、創価学会には過去にも民間信仰との直接的な接点は見当たらない。その排他的性

格は笠原⁶⁸⁾、鈴木⁶⁹⁾、西山⁷⁰⁾らにより度々指摘されている。教団は現在、信者が信仰心からでなく単に自治会の一員として祭に参加することは認めるものの、他宗教の祭祀対象物への拝礼行為は「謗法^{ほうぼう}」として明確に禁じている⁷¹⁾。

以上のように3つの教団を比較すると、民間信仰に対しては金光教、天理教、創価学会の順に親和性が強いと言える⁷²⁾。

(4) 新宗教定着の要因と民間信仰

各宗教の伝播当初において、小栗須集落の住民それぞれが具体的にいかなる民間信仰を實踐していたかを示す史料は極めて乏しい。だが、先述した24番の家のカンスケサンの伝承には山伏の病氣治癒の話が出てくる。他には23番の家でも、明治初期まで祈祷してもらっていたという伝承が残る。さらに、小栗須集落に隣接する大河内集落には、明治初期まで修験道に代々従事した家が存在した⁷³⁾。これらのことから、小栗須集落の住民の間では19世紀末まで寺院や神社、石像類と並んで、病氣や怪我の民間療法を施す、山伏の呪術に対する信仰が存在したことが窺える。

しかし、山伏は明治政府による修験道廃止令(1872年)の発令以降、小栗須集落とその周辺からも姿を消したと見られる。先述のように、天理教や金光教は明治後期以降、病氣治癒を布教手段として広まった。これらのことから、当時の人々が治病手段として、山伏に代わる天理教や金光教を受け入れたと考えられる。天理教や金光教の信仰は、それまでの住民による神社や石像物への信仰と矛盾するものではなかった。それゆえ、こうした民間信仰の伝統は、多くがジゲや稲作農家である天理教・金光教の信者や未改宗信者の間に現在も受け継がれてきている。

逆に考えれば、天理教や金光教は小栗須集落の在来の民間信仰を否定しなかったが故に、ジゲや稲作農家の間に定着することがで

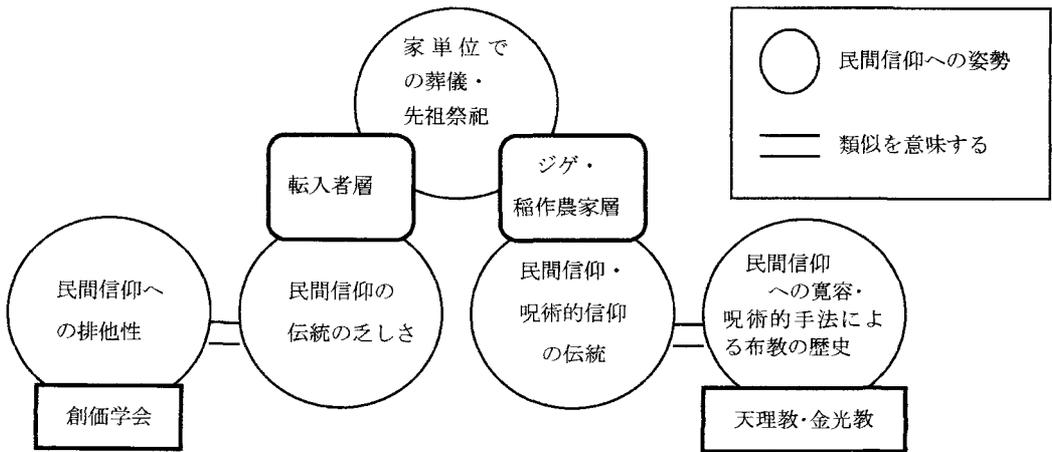


図7 民間信仰を巡る小栗須住民と新宗教の関係

きたとも言える。こうした家の人々が集落の指導的役割を担っていることも、定着に役立った。ところが、転入者にはこうした民間信仰の伝統との関わりは希薄であった。民間信仰に否定的な創価学会は、主にこうした転入者に受け入れられた。また、創価学会が定着した要因には社会変動の存在も考えられる⁷⁴⁾。この影響で、集落の共同体的性格が格段に減少し、内部での信仰の同調圧が減少した。これは、年中行事や人生儀礼の多くが消滅や衰退へと追い込まれたことから窺える。

V. 結論

本稿では、小栗須集落に対する新宗教の定着には、住民の社会的属性と民間信仰への対応、各宗教の民間信仰に対する親和性が関係していることが明らかになった。ジゲ・稲作農家の住民と転入者を、それぞれ天理教・金光教と創価学会に媒介したのは、民間信仰への姿勢の共通性であったと考えられる(図7)。このように、地域社会に対する外来宗教の定着を考える際に在来の信仰、特に民間信仰について踏まえることの有効性が確認された。

残された課題は、外来宗教を含む多様な宗

教や民間信仰が、小さな集落の中に共存している要因の解明である。だが、これも民間信仰を見ることで読み解くことができる。小栗須集落では、近隣組単位での葬儀の相互扶助や初盆の家への参拝は、宗教の違いを越えて行われている。創価学会信者も他宗教の家の葬儀を手伝うし、創価学会の家が初盆であれば曹洞宗や天理教の信者も参るのである。集落内での地縁的紐帯は、家単位での葬祭に関する慣行の中で維持されており⁷⁵⁾、創価学会信者でさえもこの紐帯の中に含まれる(図7)。こうした紐帯の存在が、小栗須集落において多様な宗教や民間信仰が目立った摩擦もなく共存している一因であると思われる。

(立命館大学大学院・院生)

【付記】

本稿は1999年12月に立命館大学文学部に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。内容の一部は2000年11月12日の人文地理学会大会(於・立命館大学)にて発表した。ご指導を戴いた河島一仁先生を初めとした立命館大学の諸先生、天理教に関してご教示を賜った天理大学おやさと研究所の堀内みどり先生、ならびに現地調査にご協力戴いた中西 進氏を初めと

した小栗須集落の方々、各教団関係者の方々に深く感謝致します。

〔注〕

- 1) 金子直樹「日本における信仰圏研究の動向—山岳宗教を中心に—」, 人文論究45-3, 1995, 114頁。
- 2) NHK放送世論調査所編『日本人の宗教意識』, 日本放送出版協会, 1984, 24~32頁。
- 3) 山口弥一郎『集落の構成と機能—集落地理学の基礎的研究—』, 博文社, 1964。
- 4) ①石原 潤「ムラの中の小地域集団について」, 人文地理16-2, 1964, 102~110頁。
②石原 潤「集落形態と村落共同体—特に讃岐の事例を中心に—」, 人文地理17-1, 1965, 38~64頁。
- 5) 水津一朗『社会集団の生活空間—その社会地理学的研究—』, 大明堂, 1969。
- 6) ①山野正彦「ムラの中の小地域集団とカミ信仰—兵庫県三田市母子を事例として—」, 大阪女子学園短期大学紀要18, 1974, 91~99頁。②山野正彦「丹羽山地における村落の空間形態とその内部構造」, 大阪市立大学文学部紀要 人文研究28-2, 1976, 23~53頁。
- 7) ①平井松午「丹波地方におけるムラの規模・形態と同族集団」, 人文地理30-6, 1978, 75~85頁。②平井松午「丹波高地東部における宮座と村落構造—京都府京北町矢代地区を例として—」, 人文地理32-5, 1980, 23~43頁。
- 8) 島津俊之「村落の空間的社会構造とその変容—京都府宇治市原町禅定寺地区の事例—」, 人文地理38-6, 1986, 62~78頁。
- 9) 林 和生「丹羽山地における村落の空間構成と村落構造—兵庫県多紀郡西紀町本郷区の事例—」(浮田典良編『日本の農山漁村とその変容』, 大明堂, 1989), 255~271頁。
- 10) 岩鼻通明「講の機能と村落社会」(戸川安章編『仏教民俗学大系7 寺と地域社会』, 名著出版, 1992, 143~158頁。
- 11) ①今里悟之「村落の宗教景観要素と社会構造—滋賀県朽木村麻生を事例として—」, 人文地理47-5, 1995, 42~64頁。②今里悟之「村落空間の分類体系とその総合的検討—長野県下諏訪町萩倉を事例として—」, 人文地理51-5, 1999, 1~24頁。
- 12) 八木康幸『民俗村落の空間構造』, 岩田書院, 1998, 1~163頁。
- 13) 今本 暁「村落内小社会集団の成立と基礎地域の社会的紐帯—滋賀県神崎郡川並を事例として—」, 人文地理52-2, 2000, 63~79頁。
- 14) 徳久球雄「群馬県下におけるキリスト教会の形成とその受容過程」(小林 望・徳久球雄『現代地理学の課題』, 学文社, 1972), 149~171頁。
- 15) 川田 力「日本におけるプロテスタント・キリスト教会の立地過程—明治期・関東地方を中心として—」, 地理科学44-4, 1989, 1~15頁。
- 16) ①竹村一男「末日聖徒イエス・キリスト教会布教の地理学的考察」, 大学院年報(立正大学大学院文学研究科)13, 1996, 163~185頁。②竹村一男「日本の地方都市における末日聖徒イエス・キリスト教会」(沼 義昭博士古稀記念論文編集委員会編『宗教と社会生活の諸相』, 隆文館, 1998), 143~169頁。③竹村一男「末日聖徒イエス・キリスト教会受容の地域的差異に関する研究—山形・富山地域における事例を中心に—」, 地理学評論73A-3, 2000, 182~198頁。
- 17) 当麻成志「天竜河岸の1農村における宗教受容と地域構造との関係」, 地理学評論33-4, 1960, 13~26頁。
- 18) 森 正康「地域社会における教派神道の受容と定着—山梨県下の禊教—」, 歴史地理学130, 1985, 1~17頁。
- 19) 宗教(成立宗教)と民間信仰との差異について、本稿では前者が教祖・教義・布教活動・教団を有するのに対し、後者はそれらを持たず、専ら地域社会に支えられた信仰であると考え(桜井徳太郎『民間信仰』, 塙書房, 1966, 10~13頁)。神社に対する信仰がどちらに含まれるかは微妙だが、「改宗」(後述)を伴う信仰を「神社神道」として宗教に分類し、宮祭への参加や未改宗の者による参拝は民間信仰の実践として把握する。
- 20) 宗教地理学では前掲14), 宗教社会学では①

- 森岡清美「日本農村における基督教の受容」, 民族学研究17-2, 1953, 1~14頁。②西山茂「日本村落における基督教の定着と変容—千葉県下総福田聖公会の事例—」, 社会学評論26-1, 1975, 53~73頁。③磯岡哲也『宗教的信念体系の伝播と変容』, 学文社, 1999, 74~143頁などがある。
- 21) 文化庁の『宗教年鑑』に記載された各宗教の信者数は必ずしも実勢を表しておらず, その詳細は不明である。だが, 井門の推計では, 1968年での実際の信者数は, キリスト教全体で約70~80万人であるのに対し, 新宗教では創価学会が350万人, 天理教が200万人などとなっている。井門富二夫『世俗社会の宗教』, 日本基督教団出版局, 1972, 19~24頁。
- 22) 森岡清美・西山茂「新宗教の地方伝播と定着の過程—山形県湯野浜の妙智會會員調査から—」(柳川啓一・安齋伸編『宗教と社会変動』, 東京大学出版会, 1979), 137~194頁。
- 23) 磯岡哲也「新宗教の地方への伝播・浸透・定着過程—円応教飯南教会の事例—」, 宗教研究60-1, 1986, 51~70頁。
- 24) 藤井正雄「奄美における宗教の受容形態—喜界島における事例—」, 人類科学31, 1978, 61~90頁。
- 25) 洗建「新宗教の受容」(程徳忠編『沖縄の外来宗教—その受容と変容—』, 弘文堂, 1978), 293~318頁。
- 26) 中牧弘允「天理教の受容と信仰生活」(九学会連合奄美調査委員会編『奄美—自然・文化・社会—』, 弘文堂, 1982), 565~571頁。
- 27) 井上順孝「奄美社会と新宗教運動—創価学会の場合を中心に—」(九学会連合奄美調査委員会編『奄美—自然・文化・社会—』, 弘文堂, 1982), 572~584頁。
- 28) ①高橋憲昭「村落に於ける宗教意識—都市近郊農村の実態調査—(その一) 村の社会的性格」, 研究紀要(華頂学園) 3, 1958, 2~22頁。②高橋憲昭「村落に於ける宗教意識—都市近郊農村の実態調査—(その二) 村の宗教行為と宗教意識」, 研究紀要(華頂学園) 4, 1959, 1~23頁。
- 29) ①志水宏行「村落社会における宗教意識の変容—兵庫県養父郡大屋町の場合—」, 大谷学報55-1, 1975, 46~63頁。②志水宏行「宗教と村落構造—滋賀県安曇川町横江の場合—」, 大谷大学研究年報31, 1979, 1~57頁。
- 30) 芹川正博『都市化時代の宗教』, 東洋文化出版, 1984, 77~102頁。
- 31) 川崎惠璋『村落・都市・宗教』, 法律文化社, 1994, 273~362頁, 及び464~533頁。
- 32) 前掲29) ②。
- 33) 前掲24) 及び29) ②。
- 34) 天理教・金光教・創価学会の各教団の関係者への聴き取りは, 1998~99年に随時行った。小栗須集落での現地調査は, 1999年3月~4月及び6月~7月の延べ25日間行った。
- 35) 行政上の大字小栗須には, 自治会である小栗須区と大谷吹山区が含まれる。本稿では小栗須区のみを対象とし, 以下「小栗須集落」と呼称する。なお, 小栗須区と大谷吹山区の境界は明確でない。
- 36) 小集落は家単位のまとまりであるため, 境界は不明確である。ただ, 下地と上地は入鹿八幡宮の入口が面する交差点により概ね区分されると認識されている。
- 37) 戸数と人口は小栗須区における1999年現在の, 不完全離村者を除いた値。
- 38) 古代に採掘が始まったとされる銅山。一旦廃坑となっていたが, 1934年から第2次大戦中にかけて繁栄した。戦後は次第に鉱脈が細り, 1978年に閉山した。
- 39) 例えば, 正月には本家への年始の挨拶が必ず行われたが, 第2次大戦後の高度成長期にはほとんど見られなくなった。
- 40) 各宗教の信者分布に関する直接的な資料は入手できなかったため, 間接的な方法を用いざるを得ないことをお断りしておく。
- 41) 1戸が改宗している大本については, この家の家族への聴き取りができなかったこともあり詳細は分からない。だが, 他の住民によれば, 現在の世帯主が昭和30年代に大阪からこの集落へ帰郷した際には, 既に改宗していたという。

- 42) 天理教の教会には大教会と分教会がある。大教会は教団本部に直属し、傘下に分教会を抱える。分教会でも別の分教会を傘下に持つものもある(天理大学おやさと研究所編『改訂 天理教事典』, 天理教道友社, 1997, 255~257頁。以下, 天理教用語の説明はこの文献に基づく)。紀熊分教会も南海大教会(和歌山県新宮市)の傘下にあるが, 自らも全国に47の分教会を持つ。
- 43) 「こもと」は旧南牟婁郡一帯に固有の組織で, 他地域における布教所に相当する。こもとの主宰者は専業の聖職者ではないが, その地位は2代目以降世襲されてきた。
- 44) 紀州藩新宮領の組名で, 矢ノ川村とその周辺の計14の藩政村からなつた。
- 45) 大江は廃仏毀釈の政府布達(1868年)を受け, 矢ノ川集落の寺院から住職を追放した。
- 46) 小栗須集落の各信者の詳細な入信時期を示す資料は残っていない。
- 47) 創価学会の信念体系を受容するよう, 布教相手に回心を促す説得活動のこと。
- 48) ある住民の話では, 当時見知らぬ創価学会信者から「仏壇などは焼いてしまえ」と折伏を受けたという。
- 49) 天理教や金光教では, 月次祭とは毎月決まった日に教会で行われる祭りのことを言う。分教会の月次祭は15日にある。
- 50) 毎月12日に主宰者宅で催される, こもと単独の祭事。
- 51) 天理教教祖・中山みきの永眠と天理教の立教を記念して, 毎年1月・10月に本部と各教会で行われる祭事。
- 52) 死去した信者の遺徳を称え, その霊を慰めるため, 本部と各教会で行われる祭事。紀熊分教会では3月・5月・9月に開かれる。
- 53) 奈良県天理市の教会本部一帯の呼称。かつて中山みきの嫁いだ家があった。
- 54) 近隣の信者による小集会。「現証」(信仰によって報われた体験)や折伏活動の報告などが行われる。
- 55) 教主や教師が信者の願いを神(金光大神)に, 神の願いを信者に伝える, 金光教の救済の業。通例, 教会長によって行われる。
- 56) 金光教に通う家族がいる10戸のうち, 上地の23・29・32番の家は同族関係で結ばれている。この一族が通うようになったのは, 小栗須集落付近に金光教が伝播した当時に32番の家(分家)の家族が通いだしたのが始まりであるという。だがこの他には, 創価学会に属する2戸が同族関係にあるだけである。
- 57) ①三重県教育委員会編・発行『牟婁地区山村習俗調査報告書』, 1971, ②吉川寿洋「奥熊野の民俗」(安藤精一編『紀州歴史研究』3, 国書刊行会, 1989), 227~246頁, あるいは③野本寛一『熊野山海民俗考』, 人文書院, 1990などを参照。
- 58) 年中行事には虫送りなどの稲作儀礼が多かったが, これらは現在では見られない。暮れと正月・節分・彼岸・盆・秋の月見の行事が行われているだけである。人生儀礼では, 2月の初午の日に厄年の厄払いが行われるなどしたというが, やはり現在ではほとんど行われていない。
- 59) 年越祭(1月)・秋葉サマの祭(2月)・入鹿八幡宮の宮祭(3月・10月)・弁財天の祭(11月)・霜月の禱(11月)である。
- 60) 同じ近隣組の者に不幸があった場合には何を置いてでも駆けつけるべきであるとされ, 基本的に全戸が葬儀を手伝う。葬儀の飾り物や料理などはほとんど住民が自作する。初盆参りも盛んで, やはり組に初盆の家があれば必ず提灯を持って参る。
- 61) いずれも集落の外縁部の場所に祀られている。これらは兄弟とされ, これが呼称の由来となっている。
- 62) 後呂山の山林に祀られる, 長さ30cm程の男性器を象った石像。
- 63) 大谷 渡『天理教の史的 연구』, 東方出版, 1996。
- 64) 松井圭介「カリスマの継承からみた天理教系教団の分派形成一場所の宗教と天啓者の宗教一」, 人文地理学研究24, 55~76頁。
- 65) 福嶋義次「慣習世界と信仰形式一金光大神理解研究ノート一」, 金光教学15, 1975, 26~51頁。
- 66) ①島薺 進「神がかりから救けまで一天理教の発生序説一」, 駒沢大学仏教学部論集8,

- 1977, 209～226頁。②島菌 進「疑いと信仰の間—中山みきの救いの信仰の起源—」, 筑波大学思想・哲学系論集 3, 1978, 117～145頁。③島菌 進「民俗宗教の構造的変動と新宗教—赤沢文治と石鎚講—」, 筑波大学思想・哲学系論集 6, 1980, 85～102頁。④島菌 進「日本の新宗教のシンクレティズム」, 文化人類学 3, 1986, 104～116頁。
- 67) 金光教本部教庁編・発行『金光教教典』, 1983, 437頁
- 68) 笠原一男『創価学会と本願寺教団—民衆宗教の体質—』, 新人物往来社, 1970, 157頁。
- 69) 鈴木 広『都市的世界』, 誠信書房, 1970, 287～291頁。
- 70) 西山 茂「新宗教信者のセクト的宗教性—仏立宗地方寺院信者の事例を通して—」(田丸徳善編『続 都市社会の宗教』, 東京大学宗教学研究室, 1984), 145～183頁。
- 71) 1999年9月9日付「聖教新聞」紙上での秋谷栄之介創価学会会長の見解。
- 72) 先に紹介した, 南西諸島でのノロ・ユタ祭祀に対する新宗教の対応に関する研究の結果も, この図式に符合する。前掲 25), 26) ならびに 27) を参照。
- 73) 紀和町史編纂委員会編『紀和町史』上, 紀和町教育委員会, 1991, 441～460頁。
- 74) 藤井の事例研究でも同様の指摘がある。前掲24) 参照。
- 75) 葬祭が果たす集落内での紐帯維持の効果については, 藤井や志水も事例研究の中で指摘している。前掲 24) 及び 29) ②参照。